

illustration by Takao Nakagawa



column | RAMPWAY 12

首都高名所案内
王子
渋沢の山は
乗物天国

コラムニスト
泉 麻人

都電の荒川線に乗って王子方面に向かうと、滝野川の素朴な家並の先にこんなもりとした飛鳥山の緑が見えてくる。都電沿線の中でも僕の好みの区間である。飛鳥山は田端の道灌山の方から続く台地の端っことで、首都高の中央環状線もこの山の下を貫いている。江戸の吉宗の時代に桜が植えこまれ、近郊の景勝地として親しまれるように

なった。公園内に入って、いつもまず目にとめるのは広場に置かれたD51蒸気機関車と都電6000型。とくに後者は僕が都電に興味をもった昭和40年代初め頃、この沿線(当時の27、32系統)の主力車両だったので、実になつかしい。あの「ALWAYS 三丁目の夕日」のモデル車両に使われているのも、こ

のタイプだ。

都電やD51が並ぶ広場の奥には、渋沢栄一の旧居やミュージアムが置かれている。渋沢というと、西の田園調布の開発の方を思い浮かべる人もいるかと思うが、氏の残した大きな事業の一つに「洋紙生産」がある。明治6年に王子製紙を開業、その流れで国立印刷局(お札を刷る)も王子の駅前に存在する。石神井川沿岸の水利も大きな役割を果たしたに違いない。そんな製紙工場を見下ろす丘に渋沢が邸宅を築いたのは明治12年、「暖依村荘」というニックネームが付けられた。

立派な母屋は昭和20年の空襲で惜しくも焼失してしまったようだが、「晩香蘆」と「青淵文庫」、二つの離れ屋が残されている。いずれも大正年間の建築で、文化住宅調の赤屋根が印象的な前者は栄一の喜寿、堅牢な銀行風の後者は傘寿を祝して友人有志から寄贈された。主に賓客の接待に使われたという両館、ちょっとした飾り模様まで実に手が凝っている。接客をする渋沢の写真も展示されていたが、燕尾服を着た小太り気味の姿からは、なかなか愛嬌が感じられる。

先の都電やD51の広場(焼失した母屋はこの辺にあったようだ)を抜けて

いくと、北方の崖地に小さなモノレールの乗り場がある。「あすかパークレール(アスカルゴ)」の山頂駅。お年寄りや幼児向けに区が設置したものだ。が、誰でも乗ることはできる。ほんの数メートル下るだけとはいえ、乗物好きには格別な景色が東の間眺められる。正面の高架線には東北本線や京浜東北線、眼下には明治通りを都バスと併走する都電、乗っているモノレールも含めて、これほどぜいたくな集合風景はそう簡単にはお目にかかれない。同乗した小さな子供が、窓に顔をすり寄せて、「あつ、京浜東北」「おつ、都電来た来た!」なんて狂喜しているのを見て、わが幼少期が回想された。

この小さなモノレールを降りると、すぐ脇に「さくら新道」という呑み屋横丁の入り口がある。飛鳥山の崖とJR線路に挟まれた細道に、いまは、数軒の店が並ぶだけだが妙にそそられる。こんどの桜の季節には立ち寄りてみたいなあ。

いずみ あさと / 1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。『週刊TVガイド』などの編集者を経て、84年、フリーのコラムニスト。近著に『箱根駅伝を歩く』(平凡社)がある。

2 コラム RAMPWAY
泉 麻人

特集 BCP

- 5 首都直下地震に備える
国土交通省 国土交通政策研究所 政策研究官
丸谷 浩明
- 8 これからのリスクマネジメント
慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 教授
大林 厚臣
- 12 コラム バイ・ザ・ウェイ 太田 治子
- 14 CHALLENGE
業務継続力の向上
- 15 データ物語
首都高ネットワークの一部が寸断されたら…?
- 16 首都高HEADLINE
- 18 business essay
宇宙からネットワークを考える
千葉工業大学惑星探査研究センター所長
松井 孝典
- 20 つくる人まもる人
首都高技術株式会社
平安 慶臣
- 22 高速百景 中野 正貴

cover photo by Minoru Saito
contents produced by
Metropolitan Expressway Company Limited